

## 技術協力活動と研修活動の連携

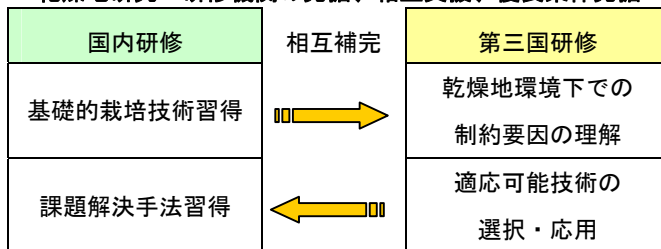
### 第4回：第三国研修重視型（乾燥地農業分野を事例にして）

ここでは、研修員が自国と類似した環境（自然、農業、文化、言語）において研修を受けるため、研修を通して得た知識・技術を自国で応用し易いという極めて重要な特徴を持った「第三国研修」を重視した連携活動について、乾燥・半乾燥地域を対象としたコースを例に挙げて提案を試みたい。増え続ける地球上の人口増加に対処するための栽培面積の拡大に伴い、環境限界地域における食糧生産は極めて重要な課題となっている。地球上の陸地面積の1/3を占める乾燥・半乾燥地域は豊富な太陽エネルギーの利用が可能な反面、高温、乾燥そして限られた利用可能水資源といった制限要因が多いため、農業開発においては地下水資源の枯渇や土壌への塩類集積といった問題が常に懸念される。したがって、乾燥・半乾燥地域においては持続的資源管理（バランスのとれた耕種及び畜産活動のための適正な土地利用、集水農業等の導入による効率的な水利用、節水技術の導入による効率的な水利用作物生産等）、および水、土壌、バイオマス等の地域資源の有効利用を考慮していかなければならない。このような状況を背景に、乾燥・半乾燥地での農業開発の担い手の育成は今後ともその重要度を増していくと考えられる。こうした人材にとっては、基礎的栽培技術の理解と共に、乾燥環境下での資源管理、地域資源の有効利用への応用技術の習得が重要になる。

現在、国際耕種はイラク人向け灌漑農地水管理技術のための第三国研修活動に参加しており、この中では地域間協力の一環として隣国シリアで実施中の節水灌漑技プロのカウンタパートによる研修活動を実施した。イラク人研修員は類似した環境下における灌漑技術をアラビア語で効率的に学ぶことが出来た。また、実施側のシリア人カウンタパートも指導することを通して理解度を深めることが出来、双方にとって極めて有意義な活動となった。このような経験も生かして、ここでは以下のような研修を提案したい。

#### 乾燥地農業分野での第三国研修との連携案

##### 乾燥地研究・研修機関の発掘、相互支援、優良案件発掘



国内研修では乾燥地環境の再現が困難であるものの、一般的な栽培技術の習得や試験研究内容の紹介あるいは農協等の組織活動視察等の分野で効果が発揮できる。現段階で考えられる研修内容としては、野菜栽培を中心とした乾燥地灌漑農業における栽培技術の基礎的知識の習得、節水に向けたドリップ、スプリンクラー灌漑手法の詳細や作物用水量の計算等も含まれる。また、これまでの野菜栽培関連コースや灌漑関連コースあるいは乾燥地域を含む国別地域別研修コースの経験も生かした各種講義に加えて、日本における乾燥地農業研究や砂地における野菜栽培の現状を紹介することも出来る。一方、第三国研修では類似気象条件のもとで研修が実施されるため、乾燥条件下での作物栽培の実情や問題点の理解そして適応可能技術の選択や応用が可能であり、こうした経験を通して国内研修で得た基礎能力をさらに深める効果が期待出来る。

第三国研修の場所としては、JICAと連携して活動できる組織を確保し、これらの機関の協力を得て国内研修で得られた知識・技術の再確認を含めて追加的な現地研修を実施する。候補となる機関としては、CGIAR傘下のICARDAやICRISAT、あるいはアラブ地域の研究機関であるACSAD等があげられる。さらに、各国の政府機関や過去の技術協力活動の一環としてJICAがアラブ首長国連邦、オマーン、トルコ等に設立した農業試験場等も有力な候補と考えられる。加えて、共にジンバブエで研修活動を展開しているパーマカルチャーのFAMBIDZANAIやHolistic Resource ManagementのACHRM (Africa Center for Holistic Resource Management) といった民間団体も候補に挙げられる。これら機関と相互に連携しながら、乾燥・半乾燥地での農業開発の担い手の育成に貢献していくことが重要である。乾燥地研究に関しては後発である日本にとって、乾燥地農業関連の各種機関との連携による第三国研修は、対象国の技術者の育成と同時に国内乾燥地研究の担い手を育てることへの一翼ともなり得る。